

他の水産動物

第1節 すっぽん養殖

スッポン *Trionyx sinensis japonicus* はカメの仲間であり、わが国では関東地方以南の河川、湖沼、池沼に生息しており¹⁾、本県でもよく見られる動物である。秋になり水温が15℃を下るようになると砂泥に潜り冬眠する。

養殖の始まりについては、1867（慶応3）年に服部倉次郎が江戸千田新田で創始し、1887（明20）年、静岡県浜名湖畔舞坂で企業化に成功したのが最初とされている²⁾。その後、同地方を中心に発展し、他の県にも普及したが、戦争に突入したため、衰退していった。戦後徐々に復興し、静岡、鳥取、奈良のほか九州でも佐賀や大分で行われるようになった。昭和40年代（1965～1974）までの生産の中心は静岡であった¹⁾が、現在では、佐賀、長崎、大分、熊本、鹿児島などの九州地区で、全国の6～7割を生産している（表1）。

表1. 年別県別生産量

単位：ト

| 年 | 1992 | 1993 | 1994 | 1995 |
|-----|------|------|------|------|
| 全 国 | 763 | 706 | 706 | 750 |
| 岐 阜 | 26 | 26 | 31 | 26 |
| 静 岡 | 119 | 106 | 98 | 101 |
| 広 島 | 22 | 19 | 17 | 21 |
| 福 岡 | 15 | 23 | 20 | 10 |
| 佐 賀 | 127 | 128 | 114 | 121 |
| 長 崎 | 77 | 103 | 121 | 142 |
| 熊 本 | 59 | 76 | 79 | 73 |
| 大 分 | 98 | 89 | 99 | 100 |
| 鹿児島 | 67 | 52 | 33 | 41 |
| その他 | 153 | 84 | 94 | 115 |

農林水産統計

1. 本県での経過

1935（昭10）年ごろ、大口町（現、大口市）の月野勇徳氏がコイやウナギといっしょに飼育を始めた^{（注）}のが最初のようなものである。スッポンだけが業として養殖されるようになったのは1974（昭49）年ごろで、地域別の状況は県水産振興課と指宿内水面分場の資料によると、表2のとおりである。即ち1974年から1980（昭55）年まで20数業者の着業があったが本格的な取り組みは少なく、また転業などで廃業し、現在は10業者となっている。

2. 生産の状況

『農林水産統計』から1977（昭52）年以降の生産量の推移を図1に示す。新たな着業や規模拡大、技術の向上もあって1983（昭58）年から急速に増加し、1992（平4）年に67トとピークとなっているが、その後は減少傾向。県水産振興課の内水面漁業調査や今回の聴取調査の結果から、現在の生産量の大半は川内市と東郷町の業者によると考えられる。全国での位置は、最近4年間は5～6番目、5～9%の生産量となっている。

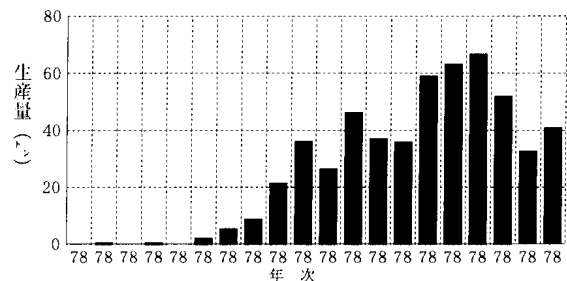


図1. スッポン養殖業生産量の推移

3. 技術の現状等

県内の養殖業者は、専業は2業者で、その他は副業として営んでいる。養成池の面積は、専業の2業者は5,000～8,000㎡、他の業者は500～1,200㎡（平均650㎡）である。施設整備や技術の程度にも相当年の違いがあり、保温設備もなく自然状態で養成する業者もあり、生産性は低い。ここでは、「ある専業の業者」から聴取した内容の一部について述べる。

（注）月野勇徳氏の娘・月野京氏より聴取（戦後は息子が昭和40年代まで継続した）。

- 1) 養成池の広さ
稚ガメ養生地 50～60 m², 食用ガメ養成池 250 m², 親ガメ養成池 400 m², 形状は八角形が多い。
- 2) 用水
河川水 (19) やボーリングによる地下水 (22～26)。
- 3) 餌料
魚粉, 澱粉, 各種添加物を購入し, 自家調製して使用。給餌量は1日当たり体重の2～2.5%。
- 4) 繁殖用親ガメ
4年ものが最適である。大きさは雄3.0 kg, 雌1.8～2.5 kg程度で, 雄雌比は雄1に対し雌5の割合。
- 5) 産卵, ふ化
産卵期は5～9月, 卵は電熱恒温設備ふ化室に収容 (1ケース400個入り), ケースの砂温を30 にして40～50日でふ化する。

表2. 市町村別着業状況

| 開始年 | 市町村 | その後の状況 |
|-------------|-------------------|--|
| 1974 ～75 | 指宿市他 | 数業者着業, 数年で中止 |
| 1976 | 喜界町 出水市 | 1992(平4)年まで3業者あったが, 現在1業者のみ継続 2業者 (うち1業者は1985(昭50)年から) いずれも副業 |
| 1977 | 徳之島町 | 1業者副業 |
| 1979 | 川内市 大和村 | 1業者が企業的規模で経営。餌の自家調製, 加工, 販売の一貫経営。 養殖場は川内市, 樋脇町, 東郷町にある 1982(昭57)年までに3業者あったが, 現在1業者 |
| 1981 | 加世田市 瀬戸内町 | 1業者が企業的規模で始めたが数年で廃業 1業者, 数年で中止 |
| 1984 | 郡山町 東郷町 | 1業者, 副業 1業者, 養鰻も営むがスッポンが主業 |
| 1985 | 薩摩町 隼人町 鹿屋市 | 1業者, 副業 1業者, 1992(平4)年廃業 1業者, 1992年廃業 |
| 1996 | 指宿市 | 1業者, 専業 |

- 6) 保温, 成長
15 以下で冬眠するので稚ガメ養成池は11月中旬から3月中旬まで保温する。ふ化後約一年余りで1～1.2kgに成長, 食用ガメとなる。
- 7) 出荷
体重800～900gで食用ガメとして販売する。方法は, ダンボール箱に10頭入れ, 航空便で東京など関東, 京阪神, 北陸などのほか, 鹿児島市中央市場にも注文に応じて出荷する。加工食品の卸販売も行っている。

4. 課題

- 1) 養殖技術の向上
前記専業者は施設も整っており技術的にも優れているが, 他の多くは副業で規模が小さく, 本格的に取り組めないため, 技術レベルも低いようである。歩留りや製品の質の向上, 短期育成のための技術研修や施設の整備改良が必要である。
- 2) 計画出荷
特殊な商品であり, 不況時における需用の拡大は困難と考えられるが, 計画的に出荷できるような飼育態勢づくりが必要である。

5. 参考文献

- 1) 梶 純夫 (1969): 養魚講座5 すっぽん. 緑書房.
2) 大島泰雄 (1994): 水産増・養殖技術発達史, 253, 緑書房, (小松 光男)